

提出日：令和 4 年 2 月 9 日  
所 属： 獣医学部 獣医学科  
氏 名： 篠塚 康典 職位： 准教授

## I ティーチング・ポートフォリオ

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲）

獣医学部獣医学科に所属し専門科目である家畜衛生学およびこれに関連した大動物臨床分野を中心とした教育・研究活動を行っている。主たる教育活動は家畜衛生学に関連する科目（家畜衛生学、家畜衛生学実習、牧場実習、産業動物獣医総合臨床、総合獣医学）と大動物臨床に関連する科目（産業動物臨床基礎実習、インターン実習、専門学外実習、産業動物臨床実習、産業動物アドバンス実習）の担当、研究室生の研究支援（獣医学特論Ⅱ、卒業論文）である。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
産業動物臨床基礎実習	獣医学科	選択	1	143
牧場実習	獣医学科	必修	2	153
家畜衛生学	獣医学科	必修	4	149
家畜衛生学実習	獣医学科	必修	4	149
インターンシップ	獣医学科	選択	4	
産業動物獣医総合臨床	獣医学科	必修	5	128
専門学外実習	獣医学科	必修	5	128
産業動物臨床実習	獣医学科	必修	5	130
産業動物アドバンス実習	獣医学科	自由	6	6
総合獣医学	獣医学科	必修	6	154
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	3
卒業論文	獣医学科	必修	6	3

### 2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

教育のあるべき目標は、自ら問いをたて、自分の頭で考え、自ら解決する力をもった人材を育成することだと考えている。実社会において、問題解決能力は必須であるが、このことを担当科目である家畜衛生学と大動物臨床分野を通して学んでいただきたい。具体的には、疾病の正しい診断からその発生要因を分析（問をたてる）、実施すべき適切な対策を考え、行動にうつすことによって疾病予防と生産性向上につながるという一連の流れの学びと体験を通して、自分の頭で考えることの重要性を伝えたい。

### 3. 教育の方法（理念を実現するための考え方、方法）

上記の理念を実現するために、主担当である家畜衛生学実習を中心に「自分の頭で考え」、「それを他人に伝えることができる」という方針で教育を行っている。具体的な方法として、家畜衛生学実習でははじめに関連する基礎的な知識について講義のあと実際に実験や測定を実施し、データ収集を行う。そして、得られた結果について「獣医師としてこの結果をどう解釈するか」という視点から考察し、これらをレポート形式にまとめて提出することとしている。これら一連の作業は班単位で行って実験や測定結果は班員で共有するものの、考察は各自で考え自分の言葉で記述するよう指導している。尚、考察にあたっては班員間でディスカッションした上で自分の考えをまとめることを推奨している。また、レポートの考察部分の記述に際しては、「正解はないこと、根拠があればそれが答えであること」をあらかじめ学生に伝え、評価基準を明確にしておくことで自分の考えたことを自由に記述できるように工夫している。提出されたレポートは、検査結果が妥当なものか、計算間違いがないかなどをチェックするとともに根拠に基づいた考察がされているか、複数の検査項目について総合的な考察がされているかなどについても読み取り、コメントを記入し学生に返却することとしている。レポート採点を通じて全体の学習効果が把握可能となり、実習時の説明内容や方法について随時改善をはかることができている（家畜衛生学実習は同一内容を複数日に分けて行っているため、後半に受講する学生教育に反映されている）。

#### アクティブラーニングについての取組

家畜衛生学実習時に課しているレポートの「考察」部分は自由記述とし、実験や測定結果だけでなく、班員のグループディスカッションの結果も反映させるよう推奨している。学生間という話やすい環境の中で、自らの考えを率直に他人に言葉で伝えようとすることで自分の考えを客観視することができ、考察が深まるよう取り組んでいる。

#### ICTの教育への活用

これまで紙媒体で配布していた家畜衛生学実習テキスト（53ページ）を2021年度はPDFでも配信した。実習時は半数以上の学生がiPad等でPDFテキストを利用していた。タブレット必携の学年が受講するまでに紙媒体はなくす予定としている。

### 4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

単元ごとに提出させているレポート採点により学生の理解度を把握することはできているものの、実習中のレポート作成時の質疑応答が十分できていないのが現状であった。しかし、今年度は1学年を4グループにわけて実習をおこなったため、対応すべき学生数が半減したことで課題であった学生とのコミュニケーションがとりやすかった。

来年度の実習形態がどのようになるかはわからないが、従来の形式にもどるのならば教員2人またはそれ以上の体制で行える環境が望ましいと考えています。また、今年度の新た

な取り組みとして、実習初めに【今日の実習の目的】を明確に示し学生に伝えることで実習の意義を共有した。

4年次の主担当科目である家畜衛生学および家畜衛生学実習において、講義内容に関連する国家試験の過去問を数問紹介した。まだ国試受験の危機感がない4年次に実際の問題とそのレベルを知ってもらうことで意識づけを行った。国家試験問題は図や写真を用いた問題を紹介することで、講義や実習で学んだことへの理解が深まりやすくなるよう工夫した。また、講義または実習で使用する国家試験問題は毎年同一のものとし、これを定期試験で出題することにより、その正答率から学生の理解度を年単位で把握している。

6年次の総合獣医学では、過去6年間の国家試験問題を分析し、家畜衛生学に関わる分野の出題傾向を講義内容と時間配分に反映させた。また、講義スライド中に関連する国家試験問題スライドを加えたPDF資料を配布し、復習しやすい教材を提供した。

## 5. 学生授業評価

対面実習が楽しかったとのコメントから、実習では講義や説明をなるべく少なくし、学生が実際に手や体を使う時間をなるべく多く取るよう工夫した。実習時の新型コロナ対策の徹底についてのコメントへは、実習専用の手袋・マスク・消毒液などを準備し、実習の開始時だけでなく実習時にも感染対策の注意喚起を口頭で行った。

手や体を使った実習時間では、班内の学生同士だけでなく、他の班とも試行錯誤しながら取り組む姿が見受けられ、有意義に取り組んでいるように見受けられた。コロナ感染対策は、実習をきっかけとしたクラスターの発生はなかったため十分であったと考えている。

対面実習でしか得られない経験の優先順位を上げるために、講義や説明は遠隔実習で行い、対面実習は手や体を使う課題をこれまで以上に用意したい。レポートに対して一人一人コメントすることでモチベーションが上がるとの意見があることから、現在の形式のレポート評価法は継続して取り組む。

## 6. 学生の学修成果

学生の理解度をレポート提出によって把握し次回の実習に反映させるとともに、提出されたレポートにはコメントをつけて返却し、復習の機会を設けている。レポート内の考察部分は自由記述としており、各々の実験結果の解釈と結論及びこれらを文章化するトレーニングを行っている。

## 7. 指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）

学内で企画・準備された研修会にはすべて参加している。

## 8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

実現したい理念は「自分で考えることができる」と「自ら問いをたて、問題解決でき

る」人材育成である。そのために、まずは自分の頭で考える機会として家畜衛生学実習を利用し、單元ごとに提出されたレポートにより習熟度を検証していきたい。

**9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ**

添付資料なし